

## 初折裏第七

同行の彼方頼みに幾年ぞ

翠

## 初折裏第八

風鈴が鳴る半月の夜

夕希

【夏 光物 時分】

この折の四句から六句まで三句ほど恋句が続きました。成就せぬが恋(恋が実らないこと)ではありますが、人生には恋の悩みが多く、人々にとっては重いものでもあります。そこに釈教(とはいいい切れませんが)の前句に付けるとなるとちょっと引きますよね。ところが、素晴らしいことに今回の応募は圧倒的多数の遣り句をいただきました。これはまさに前句との二句呼応の付けあいの体得と言えましょう。

さてこの夕希さんの句、前句との付けは巡業中の旅所の寺の軒先に下げられた風鈴の音に心安らぎ、ふと仰いだ空に月が見えた。その月はなんと半月というのがいいですね。人はたいてい満月を詠みます。しかも巡業の半ばであることも思いやられますし。

ところで今回採用句の作者は小学生です。子や孫の世代に励まされるのもいいですね。希望でもあります。例年ですと連歌講座や連歌大会に中学生、高校生に交じって小学生も奮闘します。今年はそれが叶わないところ、ボックス連歌に小学生の応募があったことは大変うれしく、役目が一つ果たせたような気がします。

今年も残すところ後わずかとなりました。次回第九句、五七五は夏を続けてもよく雑でも構いません。第十三で花を詠みますので春は避けましょう。障りは植物、水辺、山類です。よろしくどうぞ。

(次点句 いずれも作者は小学生)

## 風に吹かれて月の涼しき

美月

【夏 光物 時分】

たどり着いた御旅所。もろもろ一連の始末を終え、おなかも満ち足りて外に出ました。折からの風は涼しく、そぞろ歩きに見る月も涼やかで明日への英気が養われます。

小学生も場を踏むことで語彙が増え、古語、雅語の使い方も覚えてきます。表現したい言葉が見つかった時、文法が理解できた時の満足げな様子は見ているだけで楽しいものです。

## むし暑いなか見る丸い月

優愛

【夏 光物 時分】

こちらは何番目かの札所目前の所。汗をぬぐって見上げた空にお月様が見えます。その丸いお顔を見ると元気が出てきます。あと一息頑張ってください。頑張りますとの呼応。

「子ども連歌の会」は墨をするところから始まります。当然墨書でありますことから、硯で墨をすることも筆を持つことも初めてのお子さんがほとんどです。ある日のこと、月一回の練習会でのみの筆遣いなのにこの上達ぶりはどうしたのかと疑問に思っ、尋ねてみたら何と習字教室に通い始めたとのこと。彼らの上達ぶりもさることながら物を見る目も肥えてきます。今までは気にもしなかった小鳥の声、草木にも目が行くようになっていきます。

筆や墨を幾通りか用意していますと彼らは必ず上等品から手を出します。頂き物の中国製の銘入りの墨は早くも寸足らずとなりました。

子どもにこそ最上のものを与えなければならぬと、その昔、父の友人の絵描きさんから言われたことが深く心に残っています。上等の紙に上等の絵の具、上等の筆を与えるべきだ。子どもだからと言っていい加減なものを与えるなど。今の世の中では言わずもがなでしょうか、何しろ子ども中心で日々の生活が回っている家庭が多いとのことですから。

(講評)

光陰ふかむ朱夏の月かげ

和雄 【夏 光物 時分】

前句の「幾年」に「光陰」を掛けて、そんなにゆっくりは出来ませんよと。そしてまた方向の「彼方」に「朱夏」を掛けるとは何たる巧み。中国古来の哲理によれば「朱夏」は南の方向にあたります。

そこで前句との付けを私流に意識いたしますと、大師様との同行二人の巡業は幾年かけてもと言いますが、光陰矢の如し。朧だった月も夏を極めて秋へと光を深めています。あと一息、南の方へとお急ぎなさい。となりました。宜しゅうございましょうか。

由ある寺に涼し月影

千嘉子 【夏 光物 時分 釈教】

四国八十八ヶ所の数ある札所。中でもことに由あるお寺にたどり着き空を仰ぐと月が出ています。安堵の思いもあつてか、その涼し気な光に疲れも飛んでしまいました。

由ある寺に失礼ではありますが優れた遣り句です。

されど名月なほも涼しき

善帆 【秋 光物 時分】

今年の夏はひどい暑さの上にそれが長く続きました。陰暦八月十五日は中秋の名月です。現代のユリウス暦(太陽暦)では九月末か十月初めとなります。(今年は十月一日でした)この付け句には秋の季語と夏の季語があります。二種の季語がある場合はその句のありようで強調したいと思われる方の季を採ります。名月は何と言おうと重要な語句ですから秋を取らざるを得ません。そうしますと前句との付けは、長い道中気が付けば今日は中秋の名月らしい。だけどこの夜気は相変わらず夏の夜の涼気である。となりましようか。

風の絶え間を小鳥しき鳴く

由希子 【秋 動物】

険しい山道を風に吹かれてひたすら歩いておりますと御詠歌の鈴の音とは違う音が聞こえてきます。風がやんだときに耳を澄ますと鳥の鳴き声でした。そうだ、季節はもう秋なのだ、渡り鳥の来る季節になったのだとしみじみ思うのです。

前句のやや悲愴味を帯びた句に対して「風の絶え間」と受けて柔らかく小鳥の鳴き声を持つてきたところは巧みな付けです。優しさがにじみます。

涼しき月の光やさしき

敦子 【夏 光物 時分】

四国お遍路巡りは大師様がご一緒とはいえ昼はお天道様が夜はお月様が見守ってくれます。今夜もお月様がやさしい光を注いで前途の安全を約束してくれているかのようです。このようにさり気なく前句に付けますとお後がつけやすくなります。巧みの遣り句です。

聖火台さす月の涼しさ

大輔 【夏 光物 時分】

先日の新聞で来年の東京オリンピック聖火のリレーコース一覧表を見ました。聖火中継地では聖火台が必要なですね。四国にもそれが用意されていて、お遍路の途中それを目にしたのでしょうか。この京築地方は隣町の築城町にあります。月の光が射し込む聖火台。点火されるその日を待っています。

一際高く涼し月かげ

君子 【夏 光物 時分】

短夜に月が中天に懸かるころは夜もかなり更けております。とすると今回の巡業はひとまず終えて明日の帰省の準備に手間どったか、旅の間のあれこれに思いを巡らせているうち気が付けば月は高く上りきっておりました。との付けですね。

沙国の月も涼しかるらむ

東三子 【夏 光物 時分】

謎解きです。四国巡礼と掛けて何と解く。答えは砂漠の国。ではその心は？——皆さんと一緒に考えましょうとはいきません。まず、前句との付けは沙国を「彼方」ととりまします。と、メッカへの巡礼のイスラーム教徒に思いを馳せました。彼国彼の地に見る月は涼しくありましようか。またかの地を数多の経本を背負って歩いた三蔵法師にも思いが行きます。我国四国において今見るこの月は数時間の後に見ることになるであろう砂漠の国の人たちをも涼しく照らすことになるでしょう。

月は臙か祭りの笛か

親純 【春？ 夏？ 光物】

臙月は目に見えるもので、祭りの笛は耳で聞きます。前者は春季で後者は夏季です。春か夏か或いは視覚と聴覚のどちらかを選ぶということでしょうか。謎解きならぬあてっこゲームですね。前句との付けはどういうことになりましようか。

蜘蛛の巣アト月あかり燃ゆ

妙子 【夏 動物 光物 時分】

遍路の途中に見つけた蜘蛛の巣。その見事なまでの精緻さ、美しさに心を動かされしぼし立ち止まって眺めていると、やがて日中の火照りを帯びたかのような月が明るく蜘蛛の巣を照らします。

自然界は全てふしぎに満ちています。道具は使わず材料さえ自分自身で作りに出して蜘蛛は見事に狩り場を作ります。それになんと調和のとれた造形美でありますことか！

願かなえる流星群

敏江 【秋 光物 時】

十二月十四日は双子座流星群が見られるとのことでしたが当日になってそのことをすっかり忘れて空を仰ぐことなく寝てしまいました。敏江さんは流れ星を見つけましたか。星が流れてしまう前に願い事を唱えてしまいましたか。新月の前の晩でしたからから見えやすかったのかしら、それとも見えずらかったのでしょうか。

遍路の途中で流星群に会えるなんて巡業の甲斐があるというものです。願いはきつと叶えられることでしょうか。

月渡りゆくみじか夜の空

かおる 【夏 光物 時分】

何年にも渡る巡業の旅を続けてきました。その間にいく度もいく度も月を見てきました。上る月、沈む月、朝の月、透けるような白い昼の月。ことに夏の夜は短く、満月とあれば一晩中見ることができます。そしてそれを見る場所や時間によって見え方が違う事もこの旅の中でよく解かりました。人生を含めてそんなこんなをも領解する旅でありました。